



タイトル コラム「あすへの話題」－第四紀は残った－

掲載日 2010年1月30日(土)

掲載紙誌名 日本経済新聞

掲載面 夕刊 一面

### 第四紀は残った

国際高等研究所所長 尾池 和夫

日本学術会議は22日、地質年代を定義する重要な出来事を記念して「第四紀は残った」というシンポジウムを開催した。

国際地質科学連合は、2009年6月30日の執行委員会で、第四紀を正式の地質時代として認めることを決め、さらにその始まりを、今から258万8千年前とするという新しい定義を批准した。

「第四紀」ということは、広辞苑にも「地質年代の一つ。新生代の末期」と説明されているが、長い間、地質時代としての位置づけが学界としては不確定だった。それが国際的にきちんと定義されたのである。

第四紀の始まりは181万年前という考えもあったが、世界的に広く認められる事

#### あすへの話題



象に基づいていないため、合意が得られなかった。それが今回、地球規模の寒冷化や環境変動があり、中緯度まで氷河の出現が顕著となった時期を第四紀の始まりとすると定義された。

第四紀は現在も続いている。地球規模の激しい環境の変化の中で人類が発生し、そして進化してきた地質時代である。当然ながら、地球史の中でも最もくわしい記録がある。地球の表層に記録された環境変動の情報、近未来の地球を科学的に予測するために重要な情報である。

このような最新の地質時代の持つ意味を考えるのが、今回のシンポジウムの目的だった。地学教育や土木、災害などの分野にも新しい定義を普及する必要がある。

恐竜が絶滅したあと今に至る新生代は、古第三紀、新第三紀、第四紀に分けられることになった。この第四紀が、人類の絶滅に向かう時代にならないようにしなければならぬと思う。

タイトル コラム「あすへの話題」－神戸市の調査報告－

掲載日 2010年1月23日(土)

掲載紙誌名 日本経済新聞

掲載面 夕刊 一面

### 神戸市の調査報告

国際高等研究所所長 尾池 和夫

神戸市は以前、市域の大震災の可能性をさぐるために学術調査を実施し、わたしも参加した。その調査結果は、大震災からさかのぼること約20年、1974年に、「神戸と地震」という題の48ページの報告書にまとめられて出版された。

あらためて読み返してみても、その内容はしっかりしたものである。結論には3つの種類の地震の可能性が指摘されている。

1つは、神戸市の直下に活断層があり、それが動いたときには「壊滅的な被害を受ける」とは間違いない」とある。2つめは、近くにある活断層が動いたときに震度5の揺れになるという指摘、3つめは「南海トラフ(海溝)のくり返す巨大地震による影響である。この調査報告は、神戸新聞の第

#### あすへの話題



1面に「神戸にも直下地震の恐れ」という大きな見出しで報道された。

活断層ということばは、今では一般的に知られることばになった。その活断層ということばが自治体の報告書に使われたのは神戸と地震が最初である。

また自治体の報告書にはめずらしく断定的な表現で終わる予測が結論とされている。結論に指摘された3つのうち、最も大きな「壊滅的な被害」が起こって、神戸市には同じような大震災は今後千年以上ないだろうという安全な都市になった。しかしあとの2つは残っており、南海トラフの地震はあと30年ほどで起こり、その前後には近くの活断層が動く可能性がある。

大震災から15年、各地の活断層や地下構造調査の結果、近畿や周辺の都市は活断層性の盆地や平野にできた都市であることが明らかになった。だから神戸市に予測された3つのタイプの地震は、近畿のほかの都市にも当てはまるものである。

タイトル コラム「あすへの話題」－1995年1月の日記－

掲載日 2010年1月16日(土)

掲載紙誌名 日本経済新聞

掲載面 夕刊 一面

1995年1月の日記

国際高等研究所所長 尾池 和夫



あすへの  
話題

翌朝5時46分、震度5  
でとび起きた、と日記に  
は簡単に書いてある。こ  
の日から猛烈に忙しい毎  
日を送ることになった。

大揺れの後テレビを見ていたが、5時50分には神戸で震度6という情報があった。その画面は「ユーチューブ」で見られる。

そのときの震度6は最大級の揺れを意味する情報で、直感的に六甲山南麓の断層系が動いたと思わせる情報だった。すぐに電話してきたのは、地震のことを日ごろから取材している記者たちだった。その記者たちは、それから何年もの間、地震活動期に入った西日本のことを、くり返し市民に伝える役目を果たしている。

大地震の後ほとんどの市民は「まさか神戸に」と言った。しかし地震の前から意識的に大地震に備えていた人たちもいた。あれから15年になる明日、わたしも淡路島で「変動帯に生きる」という題で話をする。

日記を読みかえしている。1995年1月15日は大学入試センター試験の2日目だった。京都大学理学部の人試事務室で待機中、佐藤文隆理学部長と話していて、入試の最中に地震があったらたいへんだという話になった。佐藤さんが「近畿には大地震がないから」と言うので、「とんでもない」と活断層の説明をし、そろそろ近畿は地震の活動期に入るという考えを述べた。

翌日は振り替え休日在家にいた。地震の前兆現象の研究のため、電磁波を記録する装置を作って測定を続けていた。人工ノイズの多い大学構内を避けて自宅に測器を置き、モニターをときどき見ていた。その夜は自然の電磁波ノイズが多いなど思っただが、夜中に起きて気になり、波形を記録

タイトル	コラム「あすへの話題」ー平山郁夫さんのことばー		
掲載日	2010年1月9日(土)	掲載紙誌名	日本経済新聞
		掲載面	夕刊 一面

平山郁夫さんのことば

国際高等研究所所長 尾池 和夫

一年をふり返って、旅立って逝かれた方たちを想いながら新年を迎えた。その中に平山郁夫さんのことがある。平山さんが東京芸術大学の学長だったとき、国立大学協会のある会合のあと、立ち話で交わした会話が忘れられない。

世界の人びとにユネスコの目標や事業方針への理解を深めてもらうために、ユネスコは切手やメダルを発行する。日本関連のメダルは2つで、人物は湯川秀樹博士、もう一つは世界遺産で奈良のメダルである。

湯川博士のメダルは、そのとき京都大学総長だったわたしが、ユネスコから預かって2005年5月17日、夫人の湯川スミさんに渡した。物理学者ではアインシュタイン博士、ニールス・ボーア博士らについて作成されたメダルで、この

あすへの話題



メダルの湯川博士を描いたのが平山さんである。湯川スミさんは、メダルをじっと見つめたあと「秀樹さんにそっくり」

とつぶやいて、とてもうれしそうな顔を見せた。そのことを平山さんに立ち話で伝えたときの会話が忘れられないのである。

平山さんはやさしい笑顔を浮かべながら、「あなたね、肖像が似てなかったら意味がないでしょう」と言われた。文字にするあたり前のことだと思っが、わたしはそのとき、たいへん感動を覚えたのである。美術を深く追求している文字通りの大家のあたり前のひとことの中に、これほどの重みがあるということが発見であった。

平山さんが使った岩絵具には地球の歴史がある。ご自身の作品「広島生変図」について、被爆者の平山さんは「芸術は美しくなければなりません」と言ったという。そのことばに、美しい地球を、人類は戦争で汚してはならないと、あらためて思う。